手と手をつないで

No.352

柳井（やない）　美枝（よしえ）
（公社）福岡県人権研究所　特命研究員

原発被災地を訪ねて

東京での所用を終えたあと、足を延ばして福島県の原発被災地へ行ってきました。東京から常磐線を走る特急に乗ると2時間10分でいわき駅に着きます。各駅停車の電車に乗り換えて40分ほどで富岡駅に到着。富岡駅と浪江駅の間には事故のあった原子力発電所があり、その間の20・8kmは現在も帰還困難区域のために電車は不通です。津波と原発事故の被害を受けた富岡町は昨年4月に一部を除いて避難指示が解除され、津波で流された富岡駅は昨年10月、6年半ぶりに開通した駅です。

駅周辺を歩くと、汚染のために解体された家屋の廃材や家具、鉄筋の残骸などが山積みされており、7年以上経った今でも災害の爪痕が生々しく残っていました。海岸沿いでは堤防を築くための大型トラックがひっきりなしに走っています。線路脇には、汚染された土を黒い袋に入れた土のうが積まれていました。近くには汚染ゴミを燃やすための巨大な処理工場が稼働しています。道路の端では白と黄色の放射線測定器を見つけました。テレビでは見ていましたが、実物を見るのは初めてです。

駅前のベンチに腰掛けていた高齢の女性に話しかけると、1年前に避難先から戻ってきたとのこと。「よそに移って福島の米が一番美味しいと思ったよ。今はお米が作れなくて残念だね」と寂しそうに語っていました。

富岡駅からJRの鉄道代行バスが出ていたので、バスに乗り浪江駅へ向かいました。バスにはガイドが同乗しています。発車後すぐに「帰還困難区域を通過しますので、窓は絶対に開けないでください」「写真を撮る方はプライバシーに配慮してください」とのアナウンス。しばらくしてバスが双葉町や大熊町などの帰還困難区域を通過した時、私は窓外の風景に釘付けになりました。

衣料品が掛けられたまま廃墟となった大型洋品店、瓦が剥がれ落ちたスーパーや飲食店、砂埃にまみれた車やバイク。ガソリンスタンドの地面には高い草が生い茂っています。住居の玄関はバリケードで被われ、道路の要所ではガードマンが車の出入りを規制していました。雑草だらけの田んぼに立つ「福島のおいしいお米」と書かれた巨大な看板を目にしたときは涙がこぼれそうでした。

7年半前まで、この地には人々のありふれた日常があったのです。田植えや稲刈りをする人の姿、買い物を楽しむ親子連れの笑顔など。平穏な日常が一変してしまった現実。自宅が目前にあるにも関わらず戻ることができない人たち。家を、仕事を、そして大切な故郷を奪われた人たち。私は一瞬「ここは本当に日本なのだろうか」「私が住んでいるところと同じ国なのだろうか」と思ってしまいました。もしここが私の家だったら、ここが私の故郷だったら……。

ガイドから「右手に見えるのが事故のあった発電所です」とアナウンスされると、数人の乗客が原発の排気筒をカメラに収めていました。

乗車して30分後、バスは浪江駅に到着。浪江町は昭和26年にヒットした歌謡曲「高原の駅よ、さようなら」誕生の駅です。駅前に歌碑があり、その横には放射能測定器が置かれていました。浪江町の一部地域に避難指示解除が出されたのは昨年3月でしたが、駅前にはほとんど人がおらず、廃屋が目立ちます。フェンスに商工案内図が掛かっていました。かつてこの場所は、旅館や美容院、菓子店など建ち並ぶ繁華街だったことがうかがえます。

短い滞在でしたが、現存する不条理に憤りを感じつつ、この事故とは一体何だったのか、私たちは今後どのような選択をするべきなのかを考えながら、私は福島を後にしました。